

編集室から

つぶやき欄で書いたテント村から歩いていける距離に、一軒の小さな韓国料理店があります。同行の複数回訪れている方の勧めで初日の食事は、こちらでお世話になりました。メニューは無く、オモニが料理しては次々と運んでくれます。どれも彼の国のままに旨く、そして信じられない程安いのです。片言の日本語でオモニは、趣味でやっていると言っていました。自分の料理で、地元の人に元気になってほしいから、と。地元農家の姉妹が手伝いに入っていて、地域に愛されている事が見て取れます。やがてボランティアの若者も交えて、この夜は、大交歓会となりました。実に気持ちの善い人ばかりでした。

福島からやってきた女性は、みな化粧をしています。美容師という方も居て、爪も綺麗に塗られています。テント村に長い若者から「今日来たってすぐ判る。ここに長い娘は化粧をしなくなるから…」と声を掛けられていました。

炎天下、作業をしていると、被災された方から冷えたジュースの差し入れ。近辺に店舗はありません。遠くまで買出しに行ってくれたようです。感動しながら頂いた飲料の美味しかった事！

午後からの応援隊の一隊は海外からのボランティアでした。しかも、富裕層。聞くと、自分たちに何かできるか、見極めにきたらしいのです。普段なら絶対に持たないだろうスコップを持ち、日本の若者と一緒になって汗を流していました。

海外の富裕層を誘客するプロジェクトに参加していますが、こんなことがあるとは夢にも思いませんでした。海外からの渡航客が激減している中、長い信頼関係があり、きちんと説明できる旅行代理店ならば、被災地応援ツアーが富裕層向けに成立することを教えられた気がします。

顧客との信頼関係…。言葉では指摘されていますが、現場と経営者の意識は、いま何処にあるのでしょうか。地域づくり・街づくりでも、全く同じことが問われているはずです。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2011/07
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2011/07
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

文 月



能登・薬師の里にて
by hama

寄稿 『東日本大震災支援現場から』

ホテル日航金沢 マーケティング部長 岡島 憲孝

東日本大震災から三ヶ月が経ちました。国内はGWを境に自粛ムードは減りつつありますが、回復の遅れが心配なのが海外からのお客様です。

しかしながら現状を待つより、実際に被災地に向いて何か見えてくるものがあるかもしれないと、ホテルも加盟している地元の協議会のメンバー五名で六月十二日・十三日にかけて宮城県の被災地視察と復興支援ボランティア活動を行いました。

早朝に金沢を出発し、七時間かけて宮城県に到着しました。甚大な被害を受けた石巻市では海岸沿いを走行しましたが、報道されてる以上に凄まじい現場が目の前に広がっていました。自衛隊が重機、手作業でガレキの除去をされているにもかかわらず、三ヶ月経っても工場、一般家屋、車などまだまだ手付かずの場所も多く見受けられました。また、周辺の水産工場から流出物に加え汚泥の混ざった異臭が立ち込めていました。

次の視察地である女川地区も壊滅的打撃を受けていました。地形も災いし、十メートル以上の津波が四、五階建てのビルも飲み込まれ、基礎ごと倒壊していました。地区で唯一残ったのが十五メートル程の高さにある病院でした。

濱のつばき 『息の長い』

東日本大震災から三ヶ月が経った六月十一日。被災地へ向かった。金沢から、車で約七時間。石巻の街に入ると、地震で崩れた家屋・店舗を見かけたが、そんなものではなかった。道に迷って、ふと出たのが港湾地域。そこは、見るも無残だった。かなりの規模で自衛隊・警察などが応援に入っているが、被災規模の大きさを考えると、とてつもない働きをされている事が判る。

隣の女川は、さらにひどい状況だった。道路などからは瓦礫が撤去されていたが、一部に壊れた車が放置され、ビルがそのままの形で横倒しになっていた。残ったビルをよく見ると、五階部分まで津波が覆ったことが判る。その凄まじさに、言葉を失った。手向けられた花束に胸の中で手を合わせ、引き返す。

我々の目的は、被災地支援をしているNPOのボランティア活動に加わることだった。そのベースキャンプは、石巻から車で一時間ほど離れた処にある。被災地近くだと、体力を要するボランティアの精神までが疲れてしまう事に配慮した結果だという。しかも、テント村の隣に第三セクターの温泉がある。本来は、印度に学校を造る活動をしているこのNPOのトップは、さすがに現場への配慮・視点が違う。

三ヶ月を経てやや減ったとはいえ、百五十人程のボランティアがテント村にいた。中には職を辞して立ち上げて、海外から駆けつけた猛者もいた。眺めると殆どが二十・

翌朝、石巻市の渡波(わたしは)地区に集まり側溝にたつぷり溜まった汚泥の除去作業を行いました。汚泥をスコップで掘っては土嚢袋にいれてダンブに積む作業の連続ですが一日頑張っても二十名程のメンバーでは三百mが精一杯。もっと多くの人が一日だけでもボランティア活動の為に被災地に足を運んでくれれば、復興のスピードが早くなります。

私たちは、日々住む場所があり、食事にも困らず、お風呂も毎日入ることが出来ます。そして何より、毎日通勤できる職場があり、毎月振り込まれる給料があり、仕事における夢や希望があります。生きる夢や希望があるから、辛いことや悲しいことにも耐えられます。

しかし、被災者の皆様は、家を失い、家族を失い、職場を失い、所得を失っています。そのような苛酷な環境の中でも、しっかりと生きる希望を捨てず、前向きにこれからも生きていく、暮らしていくという強い気持ちとその姿に、被災地を訪れたメンバーは誰しも胸を打たれ、反対に私たちが勇気づけられました。本当に一日も早い被災地の復興を願わずにはいられませんでした。



【プロフィール】
(おかしま のりたか)
京都府生まれ。一九九四年ホテル日航金沢開業時に入社、フロント、営業、レストラン勤務を経て、現職。ホテル広報・企画担当。

三十代で、自分の付近の世代はみかけない。家族勤めさまざまな理由でここに来ないのだとしたら、この大震災の復旧・復興の手は誰に委ねられているのだろうか。

翌朝六時から朝食。弁当箱に各自詰める昼食と併せて三百人分のご飯・おかずが数人の女性ボランティアの手で供された。若い彼女らは、いつ寝ているのだろうか。

朝になってバスが一台、停まっている。見ると福島ナンバー。夜中に三時間掛けてきたらしい。被災地から被災地へ。降りてきた若者に尋ねると、「福島では一番ひどい地域には入れませんから。」「三十キロの影響だ。

テキパキと編成が組まれ、現場へと散って行く。我々は、わずか一日のボランティア。それでもも人手が足りず有難いと、感謝され、驚いた。

快晴の被災地で、埋まった側溝の掘り返し。延々とコンクリ蓋を開け、掘り、土嚢に詰め、ダンブに積載し、蓋を戻してゆく。何百mだったろうか、この日は二十数名で、千に近い土嚢を出した。午後からさすがに疲れが出て、目標を達成できるか危うくなった頃、他から応援部隊が二隊、到着。最後の土嚢を積んで歓声が上がった。

金沢から足湯サービスに駆けつけたボランティアが、現地で「自己満足でしょ」と言われショックを受けたという。阪神では、一人ずつ足を洗いながらじっくり話を聞いたという。形だけ真似て魂が忘れられてはいまいか。非被災者は、できることをしようとする。しかし、現場で求められているのは、短期的な支援ではない。

我々が参加したNPOは、地元と密接な関係を築いていた。被災地は、息の長い支援・応援を必要としている。

『 ソーシャルネットワークについて考える 』
(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

先日、ソーシャルネットワークについてのセミナーに参加した時の事である。懐かしい友人のI君から声をかけられた。I君とは最後に会ったのは13年前なので、本当に久しぶりに出会ったのである。

このセミナーは、参加費は無料なのだが、申し込みはtwitterのアカウントが必要で、このためセミナー受付のWebサイトには、参加予約ができた人達のtwitterのアイコンと、コメントが見えるようになっていた。

僕はtwitterのアイコンは自分の写真を使っている。I君はこのサイトで僕の顔写真を見ていたので、「たぶんこの会場で五十嵐さんと会えると思っていました。それで、受付周辺で待っていました。」と言っていた。

セミナーは、今流行りのfacebookについてのものだった。セミナー内容は今一つだったのだが、その後映画「ソーシャルネットワーク」を無料で見ることができ、この映画はとても面白かった。

セミナーが終わってからI君と飲みながら、お互いの近況について話した。I君とは以前同じ会社に勤めていた。I君は13年前にネット系ベンチャー企業に転職し、今ではこの会社の副社長をしている。この会社はマザーズの公開企業なので、もはやベンチャー企業ではなく、この業界では10数年社歴なら老舗といってもいいのかもしれない。

ネット系企業の経営者だから、facebookなどは使い倒しているのだろうと思って聞いてみたところ「いや、実はそうでもないんですよ。Facebookは実名なので、公開企業の経営者としてはちょっと使いづらいです。ちなみtwitterは匿名でやっています。ミクシィは3つアカウントを持っています。当然匿名です。会社の若い奴らからは、使わなくてもいいから見るだけのために、facebookのアカウントはとって下さい、と言われていました。Facebookはよく分からないので今日このセミナーに来たんですよ。」ということだった。

なるほどな、と思った。公の立場だと実名SNSは使いづらいということらしい。僕は2月からfacebookをまともに使いたしたが、それ以来古い友人とどんどんつながり始めた。5月以降は、ほぼ毎週のように古い友人との再会の飲みが続いている。全く便利なものができたと思うのだが、人によってはそうでもないと言うことのようなのだ。

しかし、このfacebookはいろんな既存のものを破壊して、新しいものを創りだしていくように思える。I君も全く同じ意見だった。まあ、そういうものは早く使った者勝ち、だと思う。皆さんも早く使った方がいいと思いますよ。

『 ラッキーマン 』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

昨晩は熱帯夜でした。ついこの前まで電気毛布で寝てて、そのちょっと前は寝苦しい夜に悩まされと一年の速さにビックリというより辟易してしまいます。今年の夏も暑いそうです。そして今年は省エネが声高に叫ばれていますので、昨年の酷暑の経験を活かし上手にそして軽やかにこの夏を過ごしたいものです。

さて今回はうちの会社で事業展開している郷土料理屋「能登の夜市」の現状についてご報告したいと思います。早いもので震災前日の3月10日にオープンし3か月が過ぎました。いい時期を知らぬまま、ゴールデンウィークに突入。そして固定客がつきはじめ安定しはじめてきた6月。いやあ激動の3か月でした。通常であればオープン景気もあり初月～2か月はお客が入り、固定客化の流れを作っていくようなのですが、それもままならないまま、ただ時が過ぎていきました。ですが私なりの結論を言わせていただければ、『私は非常にラッキーな男だ』ということにつきます。その理由は3つです。

1. 3月11日以降のオープン予定日だとしたら今でもオープンできていなかった
 - ・私自身のモチベーションの問題
 - ・何よりも建築資材や施工業者さんの手配、仕入先との経済条件交渉への支障
2. 現場で来客がない理由の検証とカイゼンを行うことが最初に徹底してできた
 - ・商品企画の見直し、原価管理の仕組み見直し
 - ・景気や消費者マインドの復調時に向けた商圏内でのPR徹底
3. 目の前のお客をいかに満足させるかに注力できた
 - ・お客様の期待価値を上回る価値を提供することをスタッフに徹底させる
 - ・一つ一つの積み重ねが強いブランド、お店、スタッフをつくりあげること

ということを自然とせざるを得ない環境におかれたからです。元来怠け者でありかつ、お調子者の私にとっては、もしもオープン景気で3月～4月にお客が入っていれば検証することもなく、かつ気づいた時にはお客様が誰も来なくなり、方向修正し再度お客様を呼び戻すには相当な時間とコスト、労力がかかったでしょう。いや多分つぶれていてもおかしくなかったでしょう。私がテナントで入っているビルの飲食店横丁でも今回の地震をきっかけにお店をたたむ所が出てきております。

苦しい時期にお客さんとして意見や評価をしてくれた友人たち、めげずに走り続けた会社のスタッフ、石川県から応援してくれた仕入先方々や県庁の皆さん。ホントありがとうございます。そして何より感謝はうちやかみさんの両親、そしてかみさんと娘ですかね。家族の応援というのは何よりの励みと勇気になることを知りました。そう、私は常々思うのですが『ラッキーな男』なんです。今日も元気ないらっしゃいませと大きな愛でみなさんをお待ちしております！

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

「阿蘇ゆるっと博」のはじまり、はじまりー 静岡県職員 溝口 久

5月18日（水）富士山静岡空港から阿蘇熊本空港に向かった。富士山静岡空港開港からすでに2年が経とうとしている。この2年間に順風、そして逆風が吹き荒れた。

地元には航空会社フジドリームエアラインズ（FDA）ができた。そのおかげで国内便は福岡、熊本、鹿児島、小松に航路が開かれ、JAL撤退後、ANAの北海道と沖縄のみの便となることが避けられた。もし、FDAがなければ、JAL便のみしかない松本空港は無用の長物になっていただろうし、小牧空港も相当に寂しい状況に陥っただろう。・・・が、この二つの空港に飛行機を回すことになってから、肝心の静岡空港便の運航時刻がよろしくない。

私が乗った熊本便は行きが12:10、帰りの熊本発が10:20。2泊3日の予定を3泊4日にしなければならなくなった。このこともあって静岡 熊本便はまさしく低空飛行。5月の搭乗率が悪ければ8月にも休航とするとFDAは言っていた。

少しでも5月の搭乗率を上げることが課題だった。熊本に行く口実に、今、熊本県と大分県にまたがる阿蘇くじゅう9市町村が一体となって開催している「阿蘇ゆるっと博」を体験すべく、旅発つことにした。そこにはグリーンツーリズム、タウンツーリズム、エコツーリズムなど着地型の多彩なプログラムが待っている。

まずは、この「ゆるっと博」の事務局である（財）阿蘇地域振興デザインセンターを訪ねた。平成2年に阿蘇地域の観光開発と地域づくりを行う組織として、県と阿蘇郡12町村の出資により設立。広域的な地域振興と観光振興センター機能を持つ組織で、事務局組織が公募による事務局長と阿蘇地域の町村からの派遣で成り立っている。運転資金は30億円の基金を2%で運用することで得ている。静岡県も伊豆の広域観光の必要性を説き、それなりに事務局を構えてやっているが、この阿蘇地域振興デザインセンターには遠く及ばない。

公募の事務局長は、小生も学んだ熊本県小国町が開催していた「ツーリズム大学」の一期の同窓生の坂本さんだ。氏はかつて請われて福岡県星野村の（財）星のふるさと事務局長を務めていたこともある。

「阿蘇ゆるっと博」は平成14年に地域振興策として、行政と民間団体や住民等地域が一体となって取り組む広域連携策として「スローな阿蘇づくり・阿蘇カルデラツーリズム」としてスタートした。以降、市町



村や県境を越えたネットワークで滞在交流型観光地づくりを進めているものだ。

今年3月12日の九州新幹線開業に合わせ、「阿蘇ゆるっと博（正式名称＝阿蘇カルデラツーリズム博覧会）」が本格スタート。

阿蘇地域のほか大分県の竹田エリアを含む4エリアに34のパビリオン、180以上のコンテンツが用意された、まさに着地型観光全集だ。パビリオンと言っても博覧会によく見られる大型仮設建築は無い。豊富にある温泉地など各地域をパビリオンと称している。

坂本事務局長の長い、メリハリの利かないお話（失礼！）によると、

観光まちづくりの進め方というのは、「まずは、地域の設定（地域自身が自分たちの住む場所をどう良くしたいか考えているか＝やる気があるか）、物（他にはない魅力があるか）、人（3人以上の若者＝継続性（子世代までも））を見極めることが重要」

ということだ。

「阿蘇ゆるっと博」では、メインコンシェルジュ（阿蘇デザインセンター）と各パビリオンのコンシェルジュが情報を共有し旅行者の相談窓口となり、地元の案内人が180を超える各コンテンツでガイドすることにより、旅行者の満足度をアップする仕掛けだ。

坂本事務局長はさらに言う。

旅館は、第一に日本人が泊まる旅館にすべし。日本人が泊まらなくなったから外国人を引っ張ろうというのでは、最終的にはつぶれる。日本の情緒に触れるために行くのだから、外国人用のホテルでは興ざめることは明らかだ。

商店街振興には、「いい物売っているところに光を当てること」が重要である。

人を呼び込むためのイベントを真っ先に考えるのではなく、まずは商店街では何ができるのかを問い詰めていく。

マーケティングというのは、単なる市場調査ではない。自分の売商品やサービスの売り上げを増やすための小手先の技術ではなく、「自分がどのような価値観を持っており、商品やサービスにどのように反映していくかを買手手に知ってもらう方法」である。

由布院は「最も暮らしやすいところこそ、優れた観光地である」として、暮らしを守り維持するために、観光を手段に使うと言ってきた。そのことをしっかり阿蘇で根付かせているのを感じた。

さあ、学びと交流の旅のはじまり、はじまり。

